

砦

福井雅人

俺はいつから此処で眠り続けているのだろう。そんな思いがいつも頭の片隅にこびり付いている。もう何年もの歳月が流れてしまったような気がする。俺は時々こうした不安から目を覚ます。此処は実に不思議なところだ。俺が寝ているベッドの周りにも、幾つもの同じようなベッドが延々と並んでいて、それを取り巻いて全体に靄のようなものがかり、ほんのりと明るい柔らかな空気を醸し出している。いったん此処へ入った人間は二度と出たくなくなってしまふ。そんな空気が漂っている。此処の空気は、どうやら思考能力を奪う働きがあるらしい。俺は最近、いやもつと前からかも知れないが、考えることが億劫になってしまった。此処でこうして眠り続けることに疑問を感じなくなってきた。此処のぬくもりから抜け出すことが非常に馬鹿げた事のように思えて来たのだった。あまりの眠り心地良いについつい長居をし過ぎたようだ。俺の四肢はだんだんと縮こまり、手足の力が抜けて行くのを屢々に感じ始めていた。しかしそれも此処の心地良さに比べれば、取るに足らない事なのかも知れない。俺はふつと頭を掠める不安を掻き消すように、また眠りへと落ちて行くのだった。或る時、俺の隣のベッドで寝ている奴が呟くように言った。

「俺はもうすぐ此処を放り出されるらしい」

暫くして気が付くと、俺は、柔らかな春の陽が降りそそぐ海辺をとぼと歩いていた。何かに導かれるように、考えながら歩いていた。歩きながら考えていた。「何故此処にいたのだろうか?」「何故こんなところを歩いているのだろうか?」考えれば考えるほど解らなかつた。しかし考えることは止めなかつた。暖かい春の陽射しと心地良い風に、心を奪われ身を任せてしまうのが恐くて、考えることに救いを求めていたのだった。それでも暫く歩き続けると考えることも次第に面倒になって、頭がボーッとし始めた時、風に乗って何やらざわめきが聞こえて来た。重い頭をもたげて見ると、大きな亀が大勢の子供達に囲まれ、苛められていた。

私は何も気付かずに判らないままに、その亀を助けてやった。

「ありがとう。わしは人間に助けられたのはあんたで二人目じゃよ」

「えっ?」

私はまだ判らずに居た。

「あのう、ここは何処なんでしょうか?」

亀は驚いた表情を見せると、ぼそつと言った。

「愚問じゃよ、わしはそんな事は知らん。ただ助けて貰った御礼がしたいだけじゃ」
 「ああ、そう云う事なのか？」

それから私は何も考えなかった。私は亀に連れられ、絵に描けないほど美しい竜宮城へ行き、乙姫様に会い、歓迎されて御馳走になり、鯛や平目の舞い踊りを観た。私は酔った。酔った頭には乙姫様が何度となく投げかけた「楽しければそれでいいのよ」という言葉が渦まいていた。そして意識が朦朧としていくのを感じながら私は飲み続け宴はいつ終わるともなく続いたようだった。

気が付くと私はさっきの海岸に座り込んでいた。視線を落とすと意味ありげに玉手箱が置かれてあった。私はブーツとしたまま、ほとんど無意識の内に箱を開けた。其処には躊躇う余地は許されていなかった。開けることが必然であった。もくもくと立ち昇る白い煙が私の視界を遮り目に滲みだした。私は煙の早く消えることを望み、消えてからのことを考えた。

「ああ。駄目だ。待ってくれ」
 当然の結果が出る事さえも、私は考えていなかったのだ。「待ってくれ。間違っていたんだ。ああっ」

私はベッドの上に身を起こしていた。汗ばんだ背中に安堵感が広がっていった。

「ああ、また歩かなければならないんだな」
 窓の外には、柔らかな春の陽射しが降りそそいでいた。